

清玄桜姫物と『雷神不動北山桜』

——『桜姫東文章』の場合——

山川 陽子

はじめに

清玄桜姫物とは、歌舞伎・人形浄瑠璃の一系統であり、清水寺の僧清玄が、桜姫の容色に迷い姫を追い求め、ついには姫の下僕に殺されるが、それでも怨霊と化して姫に付きまとうというのが基本的な筋である。清玄桜姫物の始まりは古浄瑠璃『一心二河白道』であり、人形浄瑠璃、歌舞伎以外にも、草双紙の黒本・青本、合巻、また読本の題材になっている。清玄桜姫物の芝居は、清玄が桜姫を見初めて墮落する「清水の場」と、桜姫に再会し、その下僕に殺されて怨霊となる「庵室の場」の二つの場にお家騒動や、お家再興のために苦心する家臣たちの姿を描いた場が加えられる、一つの芝居として仕立てられるというのが、清玄桜

姫物の作り方であった。

現在上演される清玄桜姫物の歌舞伎は、四代目鶴屋南北の『桜姫東文章』と、同じ作者の「女清玄」と呼ばれる『隅田川花御所染』の二作品であるが、近年の上演は『桜姫東文章』の方が圧倒的に多く、『桜姫東文章』が清玄桜姫物の代表作となっている。しかし、『桜姫東文章』は先行の清玄桜姫物を元にしながらも、南北流の改作がかなり進んだ作品であり、他の作者が「清水の場」と「庵室の場」については、先行作品の台帳をそのまま取り入れ、人名や科白を少しだけ変えるといった芝居作りをしているのに対して、南北は「清水の場」と「庵室の場」についても清玄桜姫物の趣向は借りながらも、自由に人物の設定や科白も書き換え、他の清玄桜姫物とはかなりかけ離れた作品になっ

ている。

清玄桜姫物と同様に僧侶の墮落を題材とした歌舞伎に、現在でもたびたび上演される『鳴神』がある。この論文では、その初演台帳である『雷神不動北山桜』が清玄桜姫物に与えた影響を中心に考察する。主要な論点は二つあり、「不動の場」で鳴神が不動として示現する趣向と「鳴神庵室の場」における鳴神墮落の趣向である。

一 清玄桜姫物と不動

文化五年（一八〇八）七月に大坂の小川座で上演された『清水清玄誓約桜』という清玄桜姫物の芝居がある。この芝居は、同年五月七日に京都北側布袋屋座において上演された『清水清玄庵室曙』を更に改作したものであるが、共に文化二年（一八〇五）刊行の山東京伝の読本『桜姫全伝曙草紙』を脚色した内容となっている。『清水清玄誓約桜』の台帳は所在不明であるが絵尽し【図版】と役割番附が残されており、その絵尽しには清玄を演じた四代目市川団蔵が不動の姿となった絵があり、「清玄不動となり国を守らんといふ」との言葉が添えられている。その不動の前には三木の進と水次郎に詰め寄られた蝦蟇丸の姿がある。読本『桜姫全伝曙草紙』には清玄が不動に祈る場面はあるが、不動

になるといふ場面はない。また先に上演された『清水清玄庵室曙』の絵尽しにも清玄が不動になるといふ絵はなく、台帳にも該当する箇所はない。そこで、この絵尽しがどのような場面であるかを考える上で、明和六年（一七六九）の黒本『菊重女清玄』を取り上げてみたい。『菊重女清玄』の中では殺された女清玄が、観音に変じる場面がある。

清玄一念よし仲おつけ、危うく見へしが、有馬寺の住持件の鐘向い、もんを唱へ給へば竜頭の大蛇抜け出で、清玄は観音と現じ給ふ

高橋則子は、この場面について「これはやはり前出の、寛保三年上演の『春曙廓曾我』の「女鳴神」の最終部分で、初世瀬川菊之丞が観音となる見せ場を踏まえたものである。」と述べている。そして、『春曙廓曾我』の二番目「女鳴神」は、「寛保二年正月大阪佐渡嶋座上演の歌舞伎『雷神不動北山桜』の大評判を当て込み、それを女方が演じたという趣向であることがわかる」ということである。これは、本来は女鳴神が観音に変じるといふ趣向を、草双紙『菊重女清玄』では女清玄が観音に変じるといふ趣向に変えているということが分かる。そして『雷神不動北山桜』の中では、鳴神が不動として示現している。この趣向が『清水清玄誓約桜』に持ち込まれ、清玄が不動となり示現したもの

であろう。

『雷神不動北山桜』の「不動の場」の台帳は残っていない。その代り『雷神不動北山桜』の再演である『鳴神祝ふて式三』の台帳が残されている。これは『雷神不動北山桜』の上演より四十年以上後の、天明五年（一七八五）七月二十五日、大坂、筑後芝居事大西芝居（座本、尾上丑之助）の上演で、文化五年（一八〇八）の『清水清玄誓約桜』で清玄及び不動に扮した団藏が、鳴神と不動を演じている。この『鳴神祝ふて式三』の台帳から『清水清玄誓約桜』の「不動の場」と関連があると思われる場面を紹介する。

鳴神 しばらくく。

トどろくくにて、真中へ屋体突出ス。両方へ向ケ、内に鳴神、薄衣被ぎ出ル。

早雲 王子が目の前へ化したる姿の頭れ出るは何者じや。

鳴神 善悪不二邪正一如。我鳴神上人が亡霊、目のあたり頭れて有ぞ。

ト早雲、官蔵、苦しむ。

絶間 情なや上人様。天下の為にお心を迷わし升たは自が科。サア、自らが命を絶、未来を浮かんで下さりませい。南無守り本尊不動明王。上人

様も自も、未来成仏なさしめ給へ。

豊秀・絶間 南無不動明王く。

ト豊秀、絶間、轟、合掌する。

不動 善哉く。我、誠鳴神上人にあらず。勸善懲悪の方便の為、仮に鳴神とあらわれた。今より国家の守りと成らん。我こそ大聖不動明王。誠の姿、見よ。

ト諷に成ル。薄衣とる。不動、かたち成ル。早雲 コリヤ、唯事でない。供せい。

ト逃ふとする。轟、立掛り、向ふへ立。

轟 どこへ。

ト留める。

不動 金伽羅童子、制吒迦童子、悪人を退治せい。

早雲 コリヤたまらぬ。

ト逃ふとする。半鐘、太鼓にて、ザヤン

くにて、金伽羅、制吒迦出、早雲、官蔵を追廻ス。花道へ逃るを、縛の繩にて引付られ戻る。此内囃子にて、舞台を廻り、金伽羅、制吒迦、早雲、官蔵を踏まへ、岩に登り、不動の両脇に立。豊秀、たへま、轟、要内、両方へ別レ拜む。

皆々 ハア、有難がたや。

轟 此趣を急がひで御奏聞。

轟・要内 お立。

幕

打出し

『清水清玄誓約桜』の絵尽し【図版】では、清玄が不動となる絵の記述は次のようになっている。

三木のしん つめかくる 来助

がま丸木曾の太郎と 名のる 友右衛門

水次郎若君を もり立 家をたてる 市藏

清げん ふどう となり 国を守らんといふ 団藏

この中で「清げん ふどう となり 国を守らんといふ」というのは「鳴神祝ふて式三」の「不動の場」での「善哉ぜんがい」。我、誠鳴神上人にあらず。勸善懲惡くわんぜんてうあくの方便の為、仮かりに鳴神とあらわれた。今より国家の守りと成らん。我こそ大聖不動明王。誠の姿すがた、見よ」と言つて、団藏が薄絹をとつて不動の形に成つた部分に該当する。三木の進、蝦蟇丸、水次郎が争っている場面に不動となつた清玄が現れ三者の争いを仲裁し、国を守ることを誓つたという場面であると思われ、この場面に由来するのが大名題の『清水清玄誓約桜』の「誓約」という言葉である。不動については、

役割番付のカタリでも触れられている。

菊潤の流れに露を含みし胡蝶のたはむれ

通ふ翼に二人の手弱女かざす扇は愛宕の隠れ家

奴の忠義に名僧の悟道は滝不動の靈験

ところで、歌舞伎年表の元禄七年（一六九四）の記事に「三月、京、村山平右衛門座、清玄（団十郎）亡霊となつて砂舞台のせり出し。始は顔赤く、次第に青くなり、桜姫（辰之助）を妨げ、後に荒澤不動の働き、京都の目を驚かす。」とあり、また、役者評判記「役者談合衝」（元禄十三年三月）の初代市川団十郎の記事にも「一とせ京都にて清水清玄になられ、桜姫にほれて盃をいたゞきての濡事、其上、魍魎ほうりょうと成て舞台の下より出られ、始めは顔付赤く、次第に青くなり、凄まじき体にて姫に付添、妨げと成る。不動に成ての働きよし。」とある。また、元禄八年（一六九五）の歌舞伎年表の記事に、「七月十四日より、山村座「一心二河白道」五番つゞき。五番目に「不動」あり」とある。これらの記事から、清玄桜姫物の芝居と一緒に、初代団十郎の不動があつたことは分かるが、団十郎の演じた清玄と不動との間に、芝居の筋として、どのような連続性があつたかはつきりしない。しかし、『清水清玄誓約桜』と同様に、清玄が不動となつて示現したという展開が、同一人物が演

じているという事もあり、可能性は高いと思われる。先行研究で、この清玄と不動について直接的に言及したものは特に無いようである。今のところ、『清水清玄誓約桜』の絵尽し以外には清玄が不動に変身するという場面は見いだせていないが、初代団十郎の清玄も不動に変身するという趣向であったのではないかと推測される。

この清玄が不動に変身する趣向が清玄桜姫物の基本的な筋としては残らなかつたのに対して、次に述べる鳴神墮落の趣向は清玄桜姫物に科白ごと取り込まれている。

二 鳴神墮落の趣向

鳴神上人が雲の絶間姫の肌に触れ、墮落してしまう趣向は、現行の歌舞伎『鳴神』でも行われている。この趣向は寛保二年（一七四二）一月六日、大坂大西の芝居で上演された『雷神不動北山桜』の中にも見られる⁽⁴⁾。

この鳴神墮落の趣向はかなり忠実に清玄桜姫物の中にも取り入れられているので、まずは早稲田大学演劇博物館所蔵の『雷神不動北山桜』から、該当箇所を紹介する⁽⁵⁾。

ト絶間つかへをおこす。思ひ入有。

鳴神 何としたく。

絶間 アイ思ひ切ては折升^マレ共、アかなしい事じやと

思ひ升て、此つかへがア、いたくく。

鳴神 ハテ気の毒な。葉はなし。おれがせ中もんでやろふ。

絶間 イエく勿体なひ、ナンノ。

鳴神 ハテ病ひの事じや、ナンノ遠慮があるふぞ。ドレく。

絶間 ア、いへ、いかふお中がいとふんする。

鳴神 きうびへさし込んだ物で有ふ。おれが手はにが

手じや、ゆびがさわると積じゆは直におさまる。ドレく。

トふところへ手を入ル。

絶間 アイく在がたふんする。そんなら慮外ながら。

ト鳴神ふところへ手を入レ、思ひ入有。

鳴神 よひかく。そりや、むしがぐうといふたは。

絶間 いかふ心よふんする。

鳴神 ぜんたいはよひ腹じや。チツト右へこるのじや。名養^マ婦人の病ひは右ナ物じや。

ト鳴神ちよつと手をひいて、

あじな物が手にさわつたは。

絶間 なんじやへ。何がお手にさはり升たへ。

鳴神 生れて始て女の懐へ手を入れて見れば、アノきや

うかくの間に何やら和らかな、く、り枕のやうな物が二ツ下ツて、先きにちいさなとつ手のやうな物が有ルがアレやなんじや。

絶間 お師匠様とした事が。あれやち、でムンスわいな。

鳴神 ハア乳か。ゑいじの時に有がたくも母の乳味で

育つたて、今一寺の住職と成たも全くは、人の乳の恩。其ち、を忘るゝやうになつた。ナント

出家といふ物は木のはしのやうな物じやの。

絶間 お殊勝な事でムンスル。

鳴神 ドレ／＼ち脈を取てみよふ。

ト又ふところへ手を入、

ハア、むく／＼とした物じやのふ。コレが乳で、其下がきう尾。かの病ひのこつて居る處じや。

ヲ、さつきよりよつほどくつろいだわいのふ。

コレ是此きうびの下の、コレ爰を随分といふぞや。それから下がしんけつ、ほども臍ともいふ處じや。此ほぞの左右が天すう。ナントよい気味か。ほぞから一寸間を置いて鬼界、きかいから田んでん、真下がるんばく、其るんばくの

が極楽浄土じやわいの。

次に紹介するのは宝暦十三年（一七六三）、京都四条通北側大芝居の『音羽山恋慕飛泉』の該当個所である。恋人と添われぬと知つた桜姫は願掛けをして清水の舞台から飛び降り、氣絶してしまふ。そこに通りかかった清玄は桜姫を抱するうちに、桜姫の肌に触れ、破戒墮落の身となる。

清玄 かふ抱きしめんと、良ふ成らぬてや。

ト又懐へ手を入レ、

これかの癪めが鳩尾八寸の間へ出たそふな。

桜姫 いへ／＼、そりや乳でござり升わいな。

清玄 ハア、是が乳といふ物か。はて、柔／＼と良

い遊び加減なものじやのふ。そんならこゝは。

桜姫 ヲ、こそば。そりや臍じやわいなア。

清玄 此臍から、もちつと下じや。

ト股座へ手をぐつと入れら。桜姫恠りして飛

退きこなし有て急度なり、

『雷神不動北山桜』と『音羽山恋慕飛泉』の科白を比較すると、『音羽山恋慕飛泉』の科白は『雷神不動北山桜』の科白を短くして引用していることが分かる。清玄が桜姫の肌に触れ破戒する趣向は、その後も受け継がれ、明和八年（二七七）の『清水清玄行力桜』、寛政五年（一七九三）

中村座の二番目の『まどかひそぶななかぢ遇曾我中村』や、文化二年（一八〇五）の『恋詣清水桜』、文化九年の『清水清玄面影桜』の中にも見られるので、江戸で上演された『遇曾我中村』の該当個所も引用しておく。これは『音羽山恋慕飛泉』に較べると長い科白になっているが、構造的には同じであることが分かる。

桜姫 それでもこの世で、所詮清春様に添ふ事はならぬわいなア。ア、く。

ト癩の差込む思ひ入れ。

清玄 コレく、氣を慥かに持たつしやい。ドレく。

ト抱きしめ、懷へ手を入れ、

ホウ、この脇の下へ突ツ張ツたが、癩とやら云ふものであらう。

桜姫 サア、その癩めが取詰めて、死んでしまへばよいものを。エ、死にたいくくわいなア。

清玄 ハテ、又しても死ぬるくくと。ヂツとして居さつしやれく。

トいろくこなしあつて、

ハテ、麗はしい肌ぢやなア。思へば最前偽はつて、この清玄が不義の相手となりしが、その偽はりを誠にして、かかる美人に思はれたらば、

破戒墮落も何か思はん。一切経は皆偽はり。未
来浄土に到らんより、この世の榮華、芙蓉の露
を含める粧ひ、見れば見る程、ても麗はしい。
最早清玄が心は乱れ、魂も蕩とろけたわえ。こりや
どうもならぬく。

ト桜姫をヂツと抱きしめる。

桜姫 ア、其やうになされますと、息が詰まりますわいなア。

清玄 コレく、癩めが鳩尾先へ出たさうなぞや。

桜姫 イエく、それは乳でござりまするわいなア。

清玄 ハ、ア、これが乳と云ふものか。母の乳房を放れしより、直ぐに積門に入つたこの清玄。女子の肌を初めて探つた。すりや、人間の育つはこの乳ぢやよの。ハテ、やわくとした物ぢやな。もちつと下の方を押して下さんせ。

清玄 もつと下を。斯うかく。

ト押へて、

もつと下か。斯うかく。

トぐつと押す。桜姫、悔りするを抱きしめて、

(以下略)

『鳴神』と異なる部分は、清玄桜姫物の場合、桜姫に清

玄を墮落させようとする意図はなく、清水の舞台から願掛けのために飛び降りた桜姫を、偶然通りかかった清玄が介抱するうちに、桜姫の肌身に触れて遂には自らの破戒を宣言する。桜姫が清水の舞台から傘を手にして飛び降りる趣向は、宝暦十二年（一七六二）三月、京都蛭子屋吉朗兵衛座の浄瑠璃『花系図都鑑』はなけいずみやこがみに見られるのが、一番古い例だと思われるが、この浄瑠璃では清春との恋がかなうように願掛けして飛び降りた桜姫を清春自身が抱きとめているのに対して、歌舞伎では清玄が倒れている桜姫を介抱し、墮落のきっかけとなつてるところが歌舞伎の工夫になつている。

南北の『隅田川花御所染』の場合は、女清玄であるために、桜姫が清水の舞台から飛び降りる趣向と鳴神墮落の趣向は、少し形を変えて使われている。まず桜姫が清水の舞台から飛び降りる趣向は、桜姫ではなく清玄尼が飛び降りるという趣向に変えられている。

「夢の場」で許婚の松若との逢瀬の夢を見た清玄尼は、妹桜姫の許婚の常陸之助頼国が松若の絵姿によく似ていたために、出家の身でありながら心が迷つて、このような夢を見てしまったと自らの煩惱の深さに思い悩む。そして傘を手には清水の舞台から飛び降りるとするのは清玄桜姫物の

桜姫の趣向をそのまま踏襲しているように見える。しかし、清玄尼が飛び降りるのは、従来の桜姫が清水の舞台から飛び降りる理由とは異なっている。桜姫は清春との恋が叶うように願つて清水の舞台から飛び降りるのであるが、清玄尼は清春にあたる松若との恋の成就を願つて飛び降りるのではない。その書きかえが、作者によつてかなり意識的になされていることが清玄尼の科白から分かるので、該当する科白を次に引用する。⑤花子というのは清玄尼が出家する前の名前である。

（花子）トあたりを見廻し、絵馬に掛けてある紅葉笠を取つて、

この清水の観世音へ願ひをかけ、舞台より飛び降りても、願望叶ふその時は、身に恙なしといへど、それには変り、この清玄尼は、舞台より飛び身を捨て、死んで未来をお頼み申さん。オ、さうぢや。

トおもいれ。

枯れたる木にも花の咲く、観世音の導きにて、必ず未来を助け給へ。南無大慈大悲の観世音菩薩。

ト合掌して、舞台前の桜の中へ飛び下りる。

(以下略)

清玄尼は「この清水の観世音へ願ひをかけ、舞台より飛び降りても、願望叶ふその時は、身に恙なしといへど、それには変り」と、これまでの清水の舞台からの飛び降りが現世での願望成就であったのに対して、自分は「死んで未来をお頼み申さん」と、死ぬために清水の舞台から飛び降りるのだと言って、舞台から飛び降りるのである。しかし、結果として、清玄尼は死ぬことはなく気絶して舞台の下に倒れているのを、妹桜姫の許婚頼国と名乗っている松若に助けられる。そして従来であれば清玄が気絶した桜姫に水を与えるなど介抱しているうちに、鳴神墮落の趣向となるところであるが、『隅田川花御所染』は、清玄を女清玄とした事によって、先行作品のように、鳴神墮落の趣向を科白ごと引用し、清玄の科白を清玄尼の科白、桜姫の科白を松若の科白と書き替えるという方法では、男女の性別が入れ替わってしまったっているので、場面として成立しない。そこで、鳴神墮落の趣向を、「夢の場」という清玄尼と松若との夢の中での逢瀬に変え、清玄尼の舞台からの飛び降りの契機として用いたことによって、先行作品と同様に、異性への肉体的な接触による僧侶の破戒という流れは残しながら、自然な場面展開になっている。

三 『桜姫東文章』の場合

『隅田川花御所染』が、先行作品の趣向の原型をある程度留めながら、科白のやり取りなどが更に複雑に展開していくのに対して、『桜姫東文章』は先行作品からかなり離れたものとなっている。一見すると清玄も桜姫も登場し、「清水の場」と「庵室の場」も、「新清水の場」と「岩淵庵室の場」となっているので、従来の清玄桜姫物を踏襲しているように見えるが、その趣向の使い方などは、『隅田川花御所染』のように、先行作品をなぞったものにはなっていない。鳴神墮落の趣向に関して言えば、『隅田川花御所染』では「夢の場」という清玄尼の夢の中の松若との逢瀬という形で、清玄尼の破戒のきっかけの一つとして芝居の中で生かされたのに対し、『桜姫東文章』では、清玄が桜姫の肉体に触れ、情欲を呼び覚まされるという場面はない。そして、鳴神墮落の趣向が消えた代わりに、「桜谷草庵の場」の権助と桜姫の濡れ場が、鳴神墮落の趣向が背負っていた官能性を担保することになる。『桜姫東文章』が鳴神墮落の趣向を必要としなかったのは、清玄が桜姫に執着する理由が、桜姫の前世として描かれる稚児白菊との因縁であったからである。清玄は桜姫の前世が白菊であることを知って

も、すぐに桜姫を追いかけるといふ単純な行動には出ない。清玄が破戒を宣言するまでには、「新清水の場」「桜谷草庵の場」「稻瀬川の場」の三場にわたり、清玄の気持ちの変化が描かれているので、清玄の科白を中心に関わりのある所を抜粋し、紹介する。

清玄は桜姫に十念を授けるのだが、生まれつきひらかなかつた桜姫の左手がひらいて、自分の前名清玄（この場合は「きよはる」と読む）の書かれた香箱が出現し、それを見た事によって桜姫が白菊の生まれ変わりであることを知る。

ヤ○ こりやこれ、正に○ム、薤上がじようの朝露ちようろ何易晞なんがわきやき。

露晞つゆひぬれども明朝更またあつに復落またおつ。人死一たび去つて何の時か帰るとは、古語にもいへど、これは又、一念の途にとゞまつて、輪廻しようつ放れず、生を引しか。

桜姫の左手がひらいたことよつて、腰元たちは姫の出家を止めようとするが、清玄はそのまま姫を出家させようとする。

イヤかたぐさにあらず。既に十念の功虚しからずして、不思議にも利益を受け、この儘ならば仏恩の、いかで報ずる事あらんや。たゞこれよりは釈尊の御弟子となり、愛慾の道を絶切り、只一筋に念仏修行たいま

もなく、前世の業をみてしめて、臨滅の後西方の弥陀の御国へ到られよ。その香箱のかたしにこそ、御身が為の善智識。

姫もことし十七歳過行月日も十七年。その慈明忌の然も今日、深くも思ひ入江の嶋、愛着こゝに香箱の、ハテ生死流転の境界じやナア

清玄はこの科白を潮に一旦は舞台から去るが、桜姫は権助と不義密通を働いたと咎められ、その証拠として清玄と書かれた香箱が用いられる。問い詰められた清玄は、

既に男女の愛情は、俱に臭骸を抱くとやら、悟り切たるいにしへの、大道心にも情の道、踏迷ふたる例は有れど、我に於てはなぞてこの、桜姫に恋慕せん。殊にせうこの香箱こそ、姫が開きし手の内より、出たる事は人々も最前よくも存ぜし事。

と申し開きをするが、結局は弟子の残月に押し切られる形で、不義の相手とされてしまう。

アコリヤ、我言解いひとげばこの上に、姫にいかゞなる○サ、どこ迄も。

と、清玄は桜姫を庇つて反論をやめてしまう。この辺りは白菊の生まれ変わりの桜姫を庇つたというよりは、出家したものの勤めとして、弱い者を庇っているのであるが、こ

の幕の最後に、清玄はこの様な立場に陥った自分を鑑みて、思へば因果は歴然に、廻り来りし十七年。姫が災い忽ちに、我が身に着す香箱の、印に依て終身を、あやまつ事もこれ全く、一念ここに白菊が過去着執の。

と、述懐し、逃れ難い因果というものを自覚するのである。そして、次の「稲瀬川の場合」で桜姫と共に晒されることになる。

誠や実相無漏の大海に随縁真如の月やどらんとすれば、御塵六欲の風破おこつて、これが為に影をとゞめず。我白露に濡衣の、名をけがすのも前世の因縁、誰をうらまよしもなし。

清玄はこの様な立場に陥ったのは「前世の因縁」と、一見すると単なる出家の常套句のように言いながらも、自身自身では誰よりも深く「前世の因縁」という言葉を身にしみて感じている。それを理解できるのは舞台の上には清玄以外おらず、あとは見ている観客だけがその言葉の意味する所を知る。しかし、清玄はまだ白菊の生まれ変わりとして桜姫を追い求めるといふ事はせず、一旦は自分がこの様な境遇に陥ったのは姫のせいであると責める。

ア、。誠に懸る無失の大難、思ひ廻せば因果の道理。

大俗の名は宿直之助清玄、則発心なしてより、廿の上を二つ三つ、また年若所化たる身の、児白菊と衆道のおこり、命を捨てとけいやくも、いざなごころ従事になり果て、我のみ残るは、未れんものともうたはれん。それが今さら廻り来て、世上のひとにうしろゆび、それも死だる白菊が、魂魄我に○

ト桜姫が顔をつくぐく見て、

ア、業因早き○

十七年。しかも忌日に。

人を助ける出家のならひ。

と、清玄は死んだ白菊との逃れ難い因縁を嘔みしめている。ここで桜姫に夫を持てば非人から逃れられると入れ知恵する者がおり、桜姫はそれを清玄に頼む。清玄は最初、断わるが少しづつ思いなおしていく。

サア菊の盛をちらしたる、その罪人は則清玄。かゝる業因深き身の浮む瀬さきしやういつか世もあるまひ。しからは今より破戒墮落の前世にて、ちぎりし兇と思ひかへ、そなたの力となりませふ。

と、桜姫を白菊の生まれ変わりとして関わっていくと宣言する。ここまでの清玄は桜姫の前世が白菊であると知りながらも、一步離れた立場で接しているのだが、ここからは

先行作品と同様に桜姫に強い執着を見せるようになる。

今より力となるからは、そなたの心の落付くよふ、破戒墮落の身となつて、姫とあらため一つ寝ませふ。

互ひに心一致のしるし、そなたの力となるからは、一

念五百生、懸念無量劫、骨肉は世界の土に戻れども、

魂さらに浮瀬あらじ。一度の枕は二世のかため、この身の破戒がたしかな証拠、心安かれ桜姫。

そして、珠数を切つて捨てる。この数珠を切つて破戒の証拠として見せるのは先行作品にも出てくる趣向である。

整理すると、先行作品では「清水の場」で桜姫の姿に見とれ、後に清水の舞台から飛び降り気絶した姫を介抱しているうちに鳴神墮落の趣向で、破戒に到るという基本の形があった清玄の破戒を、南北は『桜姫東文章』で、発端に「江の嶋兒ヶ淵の場」を設けた事によつて、清玄の桜姫への執着を、出家の身でありながら美しい女に触れてしまつたという単純なものから、前世の因縁という逃れ難い運命として見せている。それも、桜姫の前世を知り、すぐに白菊を慕うように姫を慕うという風にはせず、姫に執着するまでの心理、懊惱を、段階的に見せた事によつて、『桜姫東文章』は現代においても上演するに足る、劇としての複雑さを持つに至っている。それは『隅田川花御所染』におけ

る清玄尼が破戒に到る過程も、直線的には進まず、幾つかの揺り戻しの果てであるのと同様の手法であり、南北の芝居作りの巧みさの現れである。清玄桜姫物で台帳が確認できる作品は少なく、その残存作品との比較という限定付きではあるが、清玄の破戒の場面に限つて言えば、南北の『桜姫東文章』と『隅田川花御所染』以前の作品が、その先行作品の科白の流用であるのに対して、南北は清玄桜姫物の僧侶の破戒という大きな主題は用いながらも、劇の構成を大きく変え、特に『桜姫東文章』には、因果というものを持ち込むなど、他の作品には見られない工夫をしている。また、因果を用いた劇構成は、『清水清玄庵室曙』が京伝の読本『桜姫全伝曙草紙』を歌舞伎化した作品でありながら、因果という側面は切り捨てているのと対照的である。

最後に、鳴神墮落の趣向の代わりに清玄と桜姫の因果の始まりとなった「江の島兒ヶ淵の場」について述べる。『桜姫東文章』では、白菊だけを入水させ、自分は死ねなかつた自久こと清玄が、不心中の罪を購うかのごとく、白菊の生まれ変わりである桜姫の人生に関わっていく。自久が白菊入水の際に回向として唱えた「南無阿弥陀仏」という言葉が、十七年の年月を経て、白菊の生まれ変わりの桜姫に授けた十念の「南無阿弥(陀仏)」につながり、生まれつ

きひらかなかつた桜姫の左手がひらくという奇跡を起こした。この清玄の稚児白菊を通じて桜姫との關係を古井戸秀夫は「『桜姫東文章』の因縁物語」として、「清玄の肉欲の対象でしかなかった歌舞伎の桜姫に、前世の因縁を背負つて生れて来た運命の出会いが加わつたのである。」と述べている。

『桜姫東文章』の発端「江の島児ケ淵の場」の最後で、清玄は先んじて浪間へ身を投げた白菊を追つて海に飛び込むが、衣の袖が松の枝に引っかかり、死ぬことができない。結局、自分は死にきれないと諦めてからの清玄の科白を次に引用する。

ヲヲそうじや。こゝでこのまゝ、白菊一人、不心中とも思わふが、こりや共に死ふと思へばこそ、身を投たれど、因果にや、松の梢にさゝへられ、命をからむ蔦かづら、死に死れぬ浅ましい、まだ命数の尽ぬ因果。コレ白菊、跡の回向はいとなむ程に、かならずく、心替りと未来から、かならずうらんで下さるなよ。南無阿弥陀仏く。

ト浪間を見おろし回向する。うすどろくにて海中より心火燃上る。自久びつくりして、手を合わせるを木のかしら

南無阿弥陀仏くくく。

ト早口に、目を閉て合掌する。キザミにてよろしく

ひやうし幕

清玄は「まだ命数の尽ぬ因果」と、自分が死にそこなつた理由を「因果」として捉え、死んだ白菊に対しては「コレ白菊、跡の回向はいとなむ程に、かならずく、心替りと未来から、かならずうらんで下さるなよ」と回向を約束する。この発端「江の島児ケ淵の場」は清玄と桜姫の関わりが発端であるとともに、清玄が清玄阿闍梨と呼ばれる高僧にまで出世する端緒でもある。不心中で生き残つたからこそ、白菊への回向を尽す為に、仏道修行に励み、その結果として阿闍梨という位に登りつめ、その徳故に桜姫に十念を授けるといふ巡りあわせになる。

『桜姫東文章』は清玄と桜姫を中心とする因果の物語であるが、清玄が因果を強く意識して行動しているのに対し、桜姫は観客の目から見れば、彼女の身に起こることは因果故と見えても、桜姫自身は因果を特に意識することなく行動している所に、狂言としての面白味がある。清玄が様々な局面で因果というものを口にし、結局は因果の糸にからめとられるかのごとく、桜姫の目の前で死んでしまうのに対し、桜姫自身の行動は白菊として清玄に不心中の購いを

求めているかのような翻弄ぶりでありながら、彼女自身は白菊としての前世というものに無頓着であることが、清玄にとってはより残酷である。因果というものから逃れる事が出来なかつた清玄の姿は、仏教的な因果の現れそのものであるが、因果を背負つて生れながらも、それを全く意識せず、最後には因果の糸を断ち切るように、前世での不心中の相手の死を見届け、夫と子供も殺してしまい、吉田家の姫に戻つた桜姫の姿もまた、無自覚であつても人を翻弄する、因果のもう一つのあり方である。南北は『桜姫東文章』で、因果のこの二つの側面をはつきりと描いたのである。

【注】

(1) 「庵室の場」での清玄殺しが定着する以前に、庵室を清玄殺しの場所としない宝暦十二年（一七六二）七月大坂中の芝居『清水清玄六道巡』などがある。それについては、蓼美恵子の「清玄殺しの場」の変遷「六道巡型殺し場」から「庵室型殺し場」へ『国文白百合Ⅱ』（昭和五十五年三月）に詳しい。

(2) 高橋則子「黒本・青本と瀬川菊之丞『菊重女清玄』の歌舞伎接取の方法」『近世文芸49』昭和六十三年

(3) 『歌舞伎台帳集成 第四卷』（昭和五十九年、勉誠社）『雷神不動北山桜』所収の解題を参照し、資料より引用。以下、底本の引用にあたり、適宜句読点、濁点を施し、役者名は役名に改めた。

(4) 『歌舞伎台帳集成 第四卷』（昭和五十九年、勉誠社）所収の『雷神不動北山桜』の解題を参照した。

(5) 引用にあたり、当て字、誤字には「ママ」のルビを付した。

(6) 『歌舞伎台帳集成 第十六卷』（昭和六十三年、勉誠社）所収の『音羽山恋慕飛泉』より引用。

(7) 『日本戯曲全集』（昭和四年、春陽堂）所収の『遇曾我中村』より引用。

(8) 『鶴屋南北全集 第五卷』（一九七一年、三一書房）所収の『隅田川花御所染』より引用。

(9) 『鶴屋南北全集 第六卷』（一九七一年、三一書房）所収の『桜姫東文章』より引用。

(10) 古井戸秀夫「小説と演劇 桜姫の転生」『国文学 解釈と教材の研究』（平成十七年六月、學燈社）

【付記】資料の閲覧ならびに図版掲載を御許可頂きました各所蔵機関に厚く御礼を申し上げます。



【図版】 絵尽し 国立国会図書館所蔵

